

シイナグスク 2

2009年 7月

今帰仁村教育委員会

はじめに

本報告書は、平成14年度に実施されたシイナグスクの範囲確認調査の報告において十分検討することのできなかった今帰仁城跡との関連性について、研究された内容について収録した報告書であります。

今帰仁村教育委員会ではこれまで「村内遺跡発掘調査事業」を実施し、今帰仁城跡を中心とする「山北（北山）王城を中心とする文化財・史的景観の活用」を推進しております。特に今帰仁城跡に近接する集落遺跡や石積み遺構といった景観保全地区内所在の「今帰仁城跡周辺遺跡」については先に指定の答申を受けたところであります。

国指定史跡今帰仁城を中心に据えた村づくりの文化的財産は今泊区に限定されたものではありません。特に呉我山所在で本報告のシイナグスク、また運天所在の運天港の伝統的景観や百按司墓、大北墓などの墓所は山北監守の墓所であります。既にご周知のように平成12年12月には今帰仁城跡を含む県内9遺産とともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として今帰仁城跡が世界遺産登録されました。これは、琉球王国「中山王」に収斂された文化財群と言うものでありますが、シイナグスク等をはじめとする山北王に関わる文化財群を仮に「今帰仁城跡及び関連遺産群」として捉えることもできるのではないのでしょうか。

これまで今帰仁村教育委員会で取り組んできました諸種の調査によって、今帰仁城跡以外の村内の史跡が今注目されています。本研究成果を受けて、当該地域が史跡地域として保存されるように祈念するとともに、本報告書が、今後実施される今帰仁城跡及び関連遺産群の調査研究の基礎資料となることを確信しております。

最後に、これまで調査にあたっては貴重なご指導を賜りました文化庁文化財部記念物課、沖縄県教育庁文化課、沖縄県立埋蔵文化財センターをはじめ、常日頃から調査を指導していただいている今帰仁城跡調査研究整備委員会の委員諸氏に心から御礼申し上げます。

平成21年7月

今帰仁村教育委員会
教育長 謝花 弘

もくじ

第1章 概要（玉城靖）	1
第1節 位置と環境	
第2節 範囲確認調査の概要	
第2章 遺構の検討（宮城弘樹・當眞嗣一）	4
第3章 遺物の検討	7
第1節 グスク土器（具志堅亮）	
第2節 中国産陶磁器（金武正紀）	
第4章 シイナグスクを巡る伝承及び史料（宮城弘樹）	11
第5章 総括（宮城弘樹）	14
第1節 今帰仁城跡との比較	
第2節 シイナグスクの琉球史及びグスク研究における位置づけ	
第3節 まとめ	
図 版 シイナグスク空中写真・ほか	16

第1章 概要

第1節 位置と環境

シイナグスクは本部半島のほぼ中央に位置し、行政区は今帰仁村字呉我山に所在する。本部半島は東シナ海に突き出した形で半島を形成し、地形的には主に乙羽岳と嘉津宇岳・八重岳を中心とした南北にまたがる古生界からなり、両山地の四方には断層が推定され、いずれの山地も地塁状の山塊となる。中・古期石灰岩（今帰仁層）が分布する乙羽岳周辺にはカルスト地形が発達し、特に景勝地としても有名な大堂と接し、その西北端に今帰仁城跡が立地している。

また、シイナグスクの西側を蛇行して流れる大井川沿いには他にグスクンチジ、ウチグスク、ジングスクなど、今帰仁城が栄えていた時代（14～16世紀頃）のグスクが立地している。河川からやや内陸へ入った東側には天底後原遺跡、ウチグスクの緩斜面には字玉城の小字名古島原がありここでもグスク時代に該当する遺物が採集されている。さらに河川西側内陸部へ入ったところには謝名大島原遺跡があり、ここでもグスク時代に該当する遺物が採集されており河川流域や支流、丘陵部などがグスク時代より盛んに開発されたことが推測される（第1図）。このような河川沿いにグスクが立地する例は今帰仁城跡が立地する志慶真川沿い、大井川と河口を一つとするジニンサガーラなども同様で、水系がグスク時代に重要な存在であったことが想像できる。



第1図 シイナグスク他、グスク時代の遺跡

第2節 範囲確認調査の概要

1. はじめに

シイナグスクは今帰仁村を南北に流れる大井川の上流にあって、羽地内海からは2km内陸部にある大字呉我山の山頂部に築かれたグスクである。山頂の平坦地を利用した遺跡と考えられる。発掘調査の詳細な事実関係については『シイナグスク』で報告しているので参照されたい。また、本章では前回調査の要約、ポイントを列挙し、第2章以下においては前回報告書において検討不十分であった今帰仁城跡との関係を中心に述べる。

2. 調査の概要

調査は2002年に範囲確認調査を目的として今帰仁村教育委員会によって実施された。具体的には確認された平坦地の幾つかで1m×1m程度の小規模な試掘坑を設置している。10箇所の調査で、遺構の有無を確認している。山頂部の一の郭を中心に南側に面して広い平坦面を有しており、この地域及び北側の小区内において遺構が検出されている。柱穴や炉跡が確認されていることから、恒常的な生活があったことが想定されている。

3. 遺構の概要

①石積み遺構：石積みは今帰仁城跡と同様、古期石灰岩の野面積みである。一の郭の北側は岩盤の発達が著しいため、天然の要害のため石垣は築かれていない。逆に平坦なテラスが続く一の郭と二の郭を分断するように石垣が築かれ、岩盤と岩盤を結ぶように約50m確認された。そのうち残りのよかった約5mを図化した（第2図）。さらにT.P.3では石積みの構築年代の推定をするために基礎確認を行ったが、岩盤に直接根石が設置されていて年代的な把握はかなわなかった。

②柱穴：T.P.6・7・8で掘立柱建物の柱穴と思われる遺構が確認されている。しかし、矮小なトレンチのためプランの確認はなされていない（第3図：T.P.7）。

③炉跡：一の郭北側にあたるT.P.10ではほぼ円形の炉跡が確認された（第4図）。直径約90cm、深さ約40cmの規模の炉底には大量の炭が堆積していた。遺構内の覆土は直上・上層・下層・最下層の4つに分けて土壌のサンプルを採取、フローテーション処理の後、浮遊物を分析した結果、イネ、アワ、キビ、コムギ、オオムギ等の栽培植物が採取されている（第5図）。

4. 出土遺物の概要

出土した遺物は破片総数2,609点。その95%はグスク土器が占める。陶磁器は全て中国産で青磁と白磁が出土する（2%）。

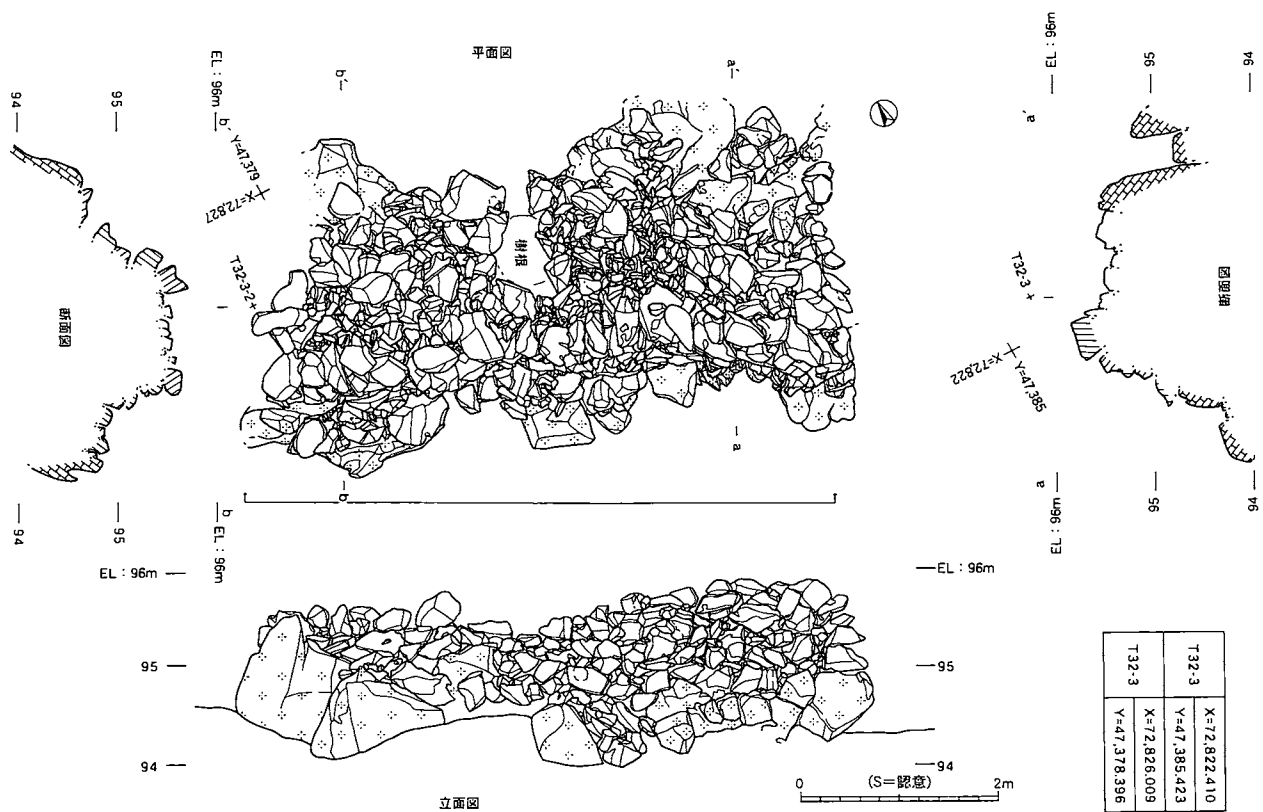
①グスク土器：第3様式のほぼ単純資料で、鍋（鉢）を主体に、壺、甕、碗が得られる。

②カムイヤキ：多くは厚手になる新段階（B群）破片となるが、古段階（A群）に属する資料が数点確認されている。

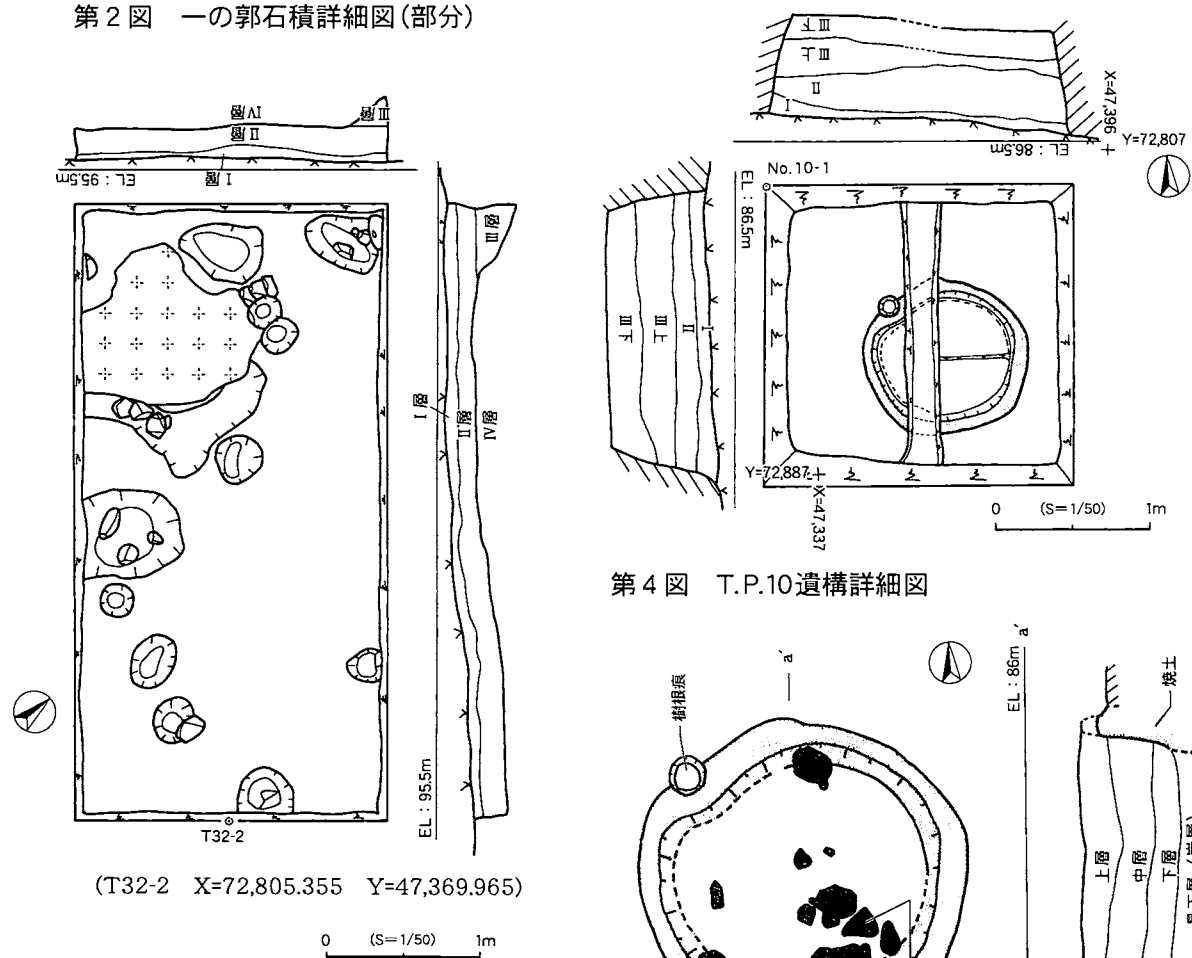
③青磁：同安窯系Ⅰ-1aの無文皿。龍泉窯系Ⅰ-4b類（劃花文碗）、Ⅱ類（鎏蓮弁文碗）が出土、小片だが1点のみⅢ類（Ⅲ-1）と考えられる資料も得られている。

④白磁：A群（口禿碗・皿）、F群（今帰仁タイプ碗）が得られている。

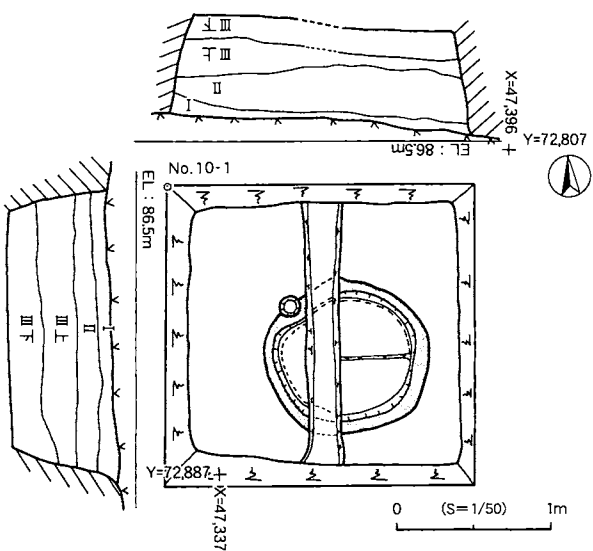
年代的には龍泉窯系Ⅱ類+白磁A群を主体とし、かつⅢ類の出現期を廃絶年として想定され、さらに土器においても第3様式で限定でき、13世紀後半を中心とする時期と考えられる。長期間継続することが多いグスクでは、編年的に良好な資料が少ない中にあり、シイナグスクは陶磁器では大宰府E・F期に限定することができ、沖縄における良好な標識資料である。



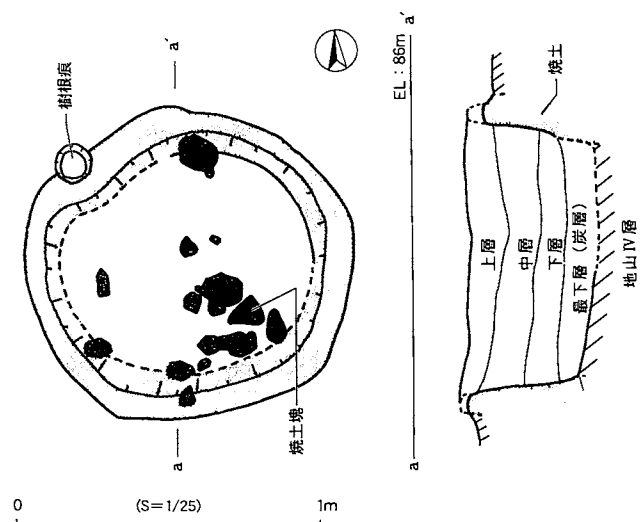
第2図 一の郭石積詳細図(部分)



第3図 T.P.7遺構詳細図



第4図 T.P.10遺構詳細図



第5図 炉跡詳細図

第2章 遺構の検討

1. はじめに

シイナグスクは、標高約93mの丘陵に立地している。主体部と考えられる最高所には石積みが見られ、岩盤と岩盤の隙間を埋めるように構築されている。主体部の部分的な試掘調査から掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピットが複数確認されている。シイナグスクの立地は西側に大井川という河川が深い溪谷をつくり、東側は谷筋があって、北側は断崖、南側は緩斜面となっている。シイナグスクの郭配置を概観すると、山頂部に一の郭を配置し、南側に順次二の郭、三の郭を配置し、これより南側は隔絶を明確に示す防御施設は現在のところ認められていない。また一の郭北側には自然岩の露頭地が広がるがこれらの露頭の認められない狭小な平坦地が複数ある。これら北側に広がる狭小な郭群を総じて北の郭として、現在1～3まで確認されている。平坦地は複数あるが、試掘を実施し包含層が確認され恒常的な生活の痕跡が認められたものが3つに限られているので今後の調査によって数の特定と、空間の配置及び機能について解明することが課題となる。

なお、郭のそれぞれの規模は以下のとおりである。北の郭は狭小で100㎡～250㎡程度の規模のものが複数。一の郭は高さ1m、幅2.5mの石積みが延長100mが岩盤と岩盤を繋ぐように積まれ、石積みと岩盤に取り囲まれた郭の面積が約800㎡である。二の郭は最も広く約4,200㎡、三の郭は約1,000㎡で3郭合わせると6,000㎡となる

2. 縄張りの検討（第6・7図）

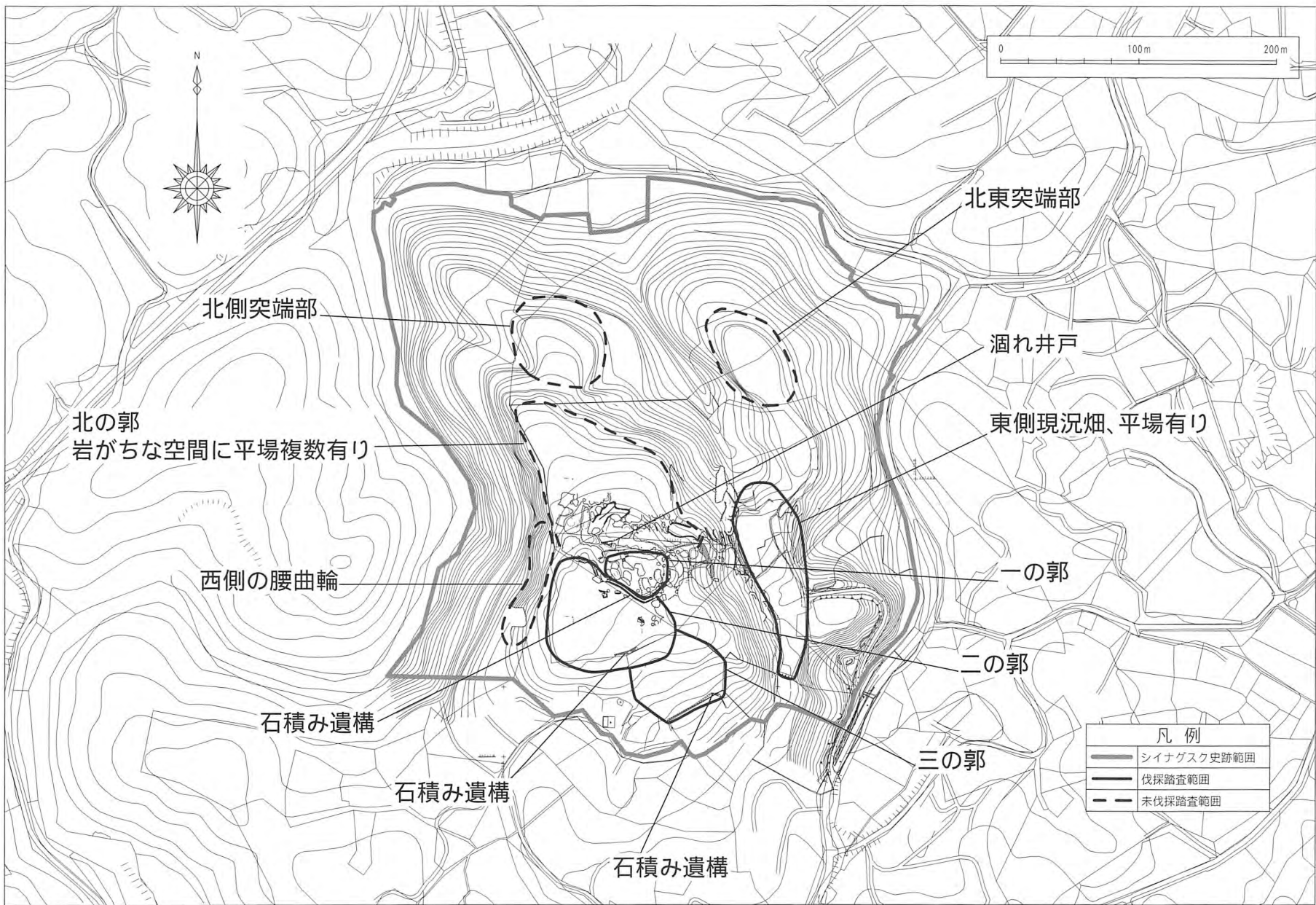
シイナグスクの四囲の防御ラインの様子について確認してみたい。まず西側に深い谷が断崖となって防御ラインをつくっており、この点では西側の防御は堅固であると言える。加えて、西側断崖沿いには数ヵ所腰曲輪的平坦地が認められる。断崖に腰曲輪を配し防御的意図のもと構築されている可能性が考慮される。次に北側の丘陵突端部は地形図上は平坦地となっているが、やや露頭岩が多く認められ、恒常的な生活空間としては不適である。しかし、丘陵突端からの眺望は開けており例えば見張りの意図を持って機能していないか検討が必要である。一方、東側は一部畑等によって現地形が失われているが、崖側はそのほとんどが露頭岩が屹立しており岩盤自体が障壁化している。これらの崖斜面で比較的ゆるやかなところに平坦な空間が幾つか認められることから、防御的意図をもって平坦地が配置されているものと推測される。なお、南側一帯の緩斜面と仮称二の郭及び三の郭とする空間との間は露頭岩が屹立する地点が認められ、この場所までが主体部から連続的に平坦となっている様子が見られる。

次に、最も肝心のグスクの入り口部分となる虎口だが、残念ながら確定的にその虎口を特定するには至っていない。これについては本格的な調査によって明らかにされるべきである。確定的なことは言えないものの、一の郭の南側は堅固な石積みを配す一方、北側は石積みがやや途切れ途切れとなっており、特に南側緩斜面の三の郭部分までを防御しようとする意図が見られる。また一の郭の石積みについては岩盤を取り込んで自然の折れを作出しているように見受けられる。

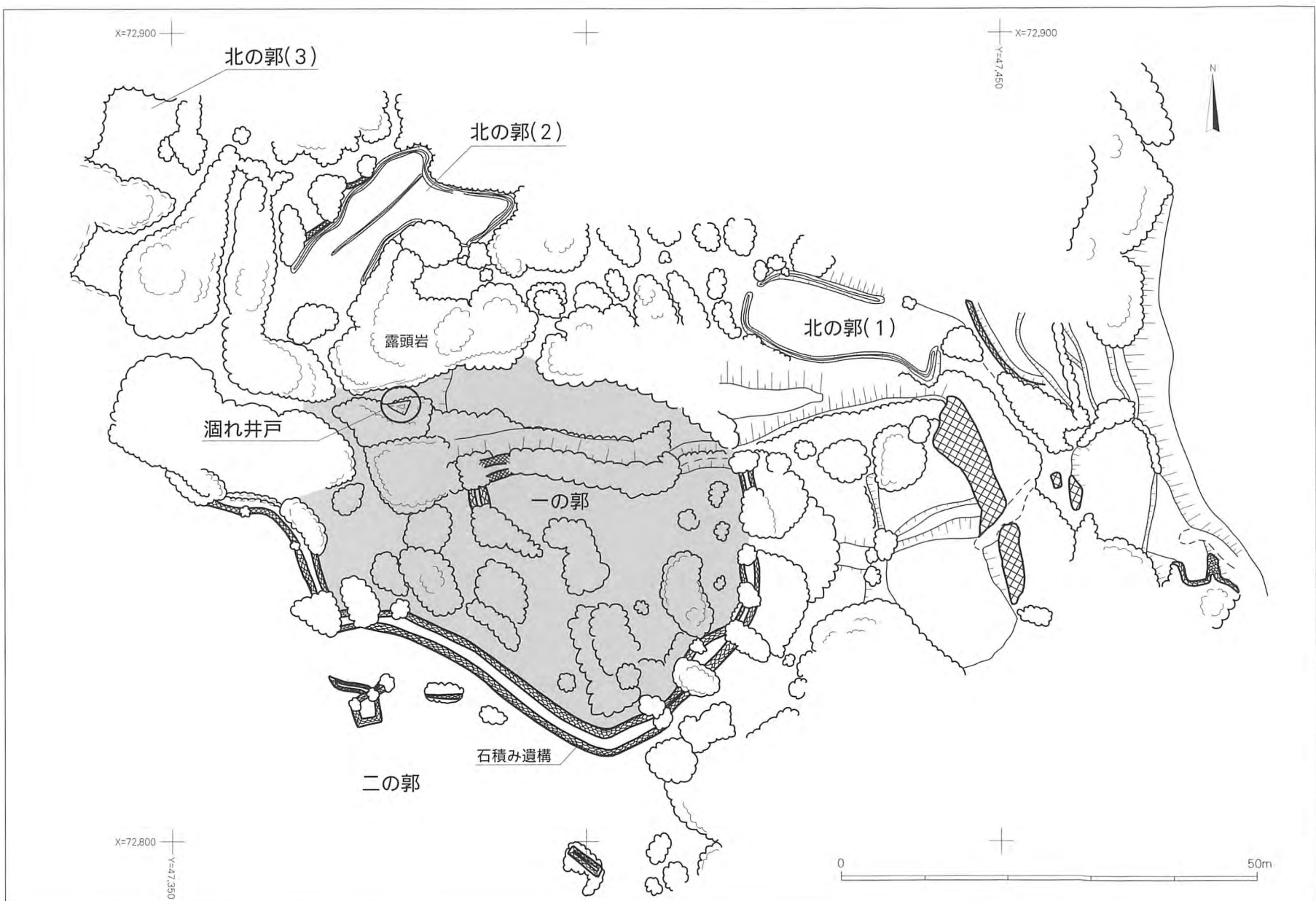
最後に井戸の取り込みと配置関係だが、主体部とした一の郭の北側に井戸が配されている。井戸の構造的には石積みなどの構築物は残されていない自然の湧泉と見られ、沖縄特に先頭地域に見られるウリガー（降り井戸）形式に類しており、溜れ井戸は開口部のサイズが長軸2.2m、短軸1.2m、深さは4mを測る。

3. おわりに

以上総括すると、グスクの主体部と推測される一の郭を中心に、自然地形をうまく取り込みながら防御空間を創出したグスクとしての評価を与えることが出来ると考えられる。また今帰仁城跡の山頂部との景観的な類似性は基盤岩のみならず規模などにおいても認められることから、今後の発掘によって特に今帰仁城跡主郭初期段階の比較によって城郭初期の様子が明らかになっていくものと考えられる。



第6図 シイナグスク縄張り現況図



第7図 シンナグスク縄張り詳細図

第3章 遺物の検討

第1節 グスク土器

1. はじめに

シイナグスク、今帰仁城跡主郭IX～VII層出土遺物の主要となる遺物の一つとしてグスク土器が挙げられる（金武ほか1991）（宮城ほか2004）。グスク土器はグスク時代の遺跡から多く出土する遺物として挙げられ、グスク時代の文化様相や交流を考えていくうえで非常に重要な遺物となる。このグスク土器は滑石製石鍋を模倣して製作されたことを端緒とし、以降器種の多様化、型式変化を行いながら煮沸具、供膳具、貯蔵具などとしてグスク時代の初期に使用される遺物である。

2. グスク土器の編年

グスク土器はその初期から終末期（約11世紀後半～14世紀頃）にかけて、製作の粗雑化（型式変化）が看取され、第1様式段階から第3様式段階へと変化を追うことが可能である（宮城・具志堅2007）。特に、型式変化の窺える鍋・甕形土器を見ると、鍋形土器はその祖形となる滑石製石鍋を忠実に模倣し、丁寧に製作されているものから（第1様式段階）、縦耳が形骸化し、口縁部が内湾化する器形（第2様式段階）へと型式変化し、最終的には、縦耳が消失し口縁部が顕著に内湾する器形（第3様式段階）へと型式変化する。甕形土器は、器形の最大径となる口唇部から、張りの弱い胴部へと移行する器形（第1様式段階）から、口頸部が短小化し、頸部の屈曲が強い器形（第2様式段階）から、口頸部が短小化し、頸部の屈曲が微弱となり、胴部の張りが強くなる器形（第3様式段階）へと変化する。器面調整を見てみると、工具調整痕を丁寧にナデ消しを行うもの（第1様式段階）から、やがてナデ消しを行わないもの（第2様式段階）へと簡素化し、最終的には工具調整自体も簡素化され、器面に成形痕である指頭痕が顕著に残るもの（第3様式段階）へと移行する。また器種構成も変化し、初現期は鍋・甕の二器種で構成される（第1様式段階）が、やがて、壺・碗が出現し（第2様式段階）、これら4器種がグスク土器の主要な器種組成となるもの（第3様式段階）へと変化する。

3. シイナグスクと今帰仁城跡のグスク土器について（第8図）

上記した様相を勘案しながらシイナグスクと今帰仁城跡主郭出土のグスク土器を比べると、多くの共通点が確認できる。両遺跡出土土器は主要となる器種は鍋・甕・壺・碗の4器種となる。型式的なまとまりを確認できる鍋・甕形土器を詳しく見てみると、両遺跡とも鍋形土器は、口縁部が内湾し、口唇部が丸みを帯び舌状となり、成形痕である指頭痕が口縁部に残る型式が主体となり、甕形土器は頸部屈曲部から口唇部までの長さが短く、また屈曲の弱くなった型式が主体となる。

上記のような状況から、シイナグスク・今帰仁城跡主郭出土のグスク土器は共に、グスク土器の第3段階に相当すると考えられる。また今帰仁城跡では、IX～VII層においてはグスク土器が大量に出土しているのに対して、その上層のVI・V層では出土量を急激に減じている（金武ほか1991）。このことから、両遺跡出土のグスク土器はグスク土器の終末型式に位置づけられると考えられる（具志堅2006）。

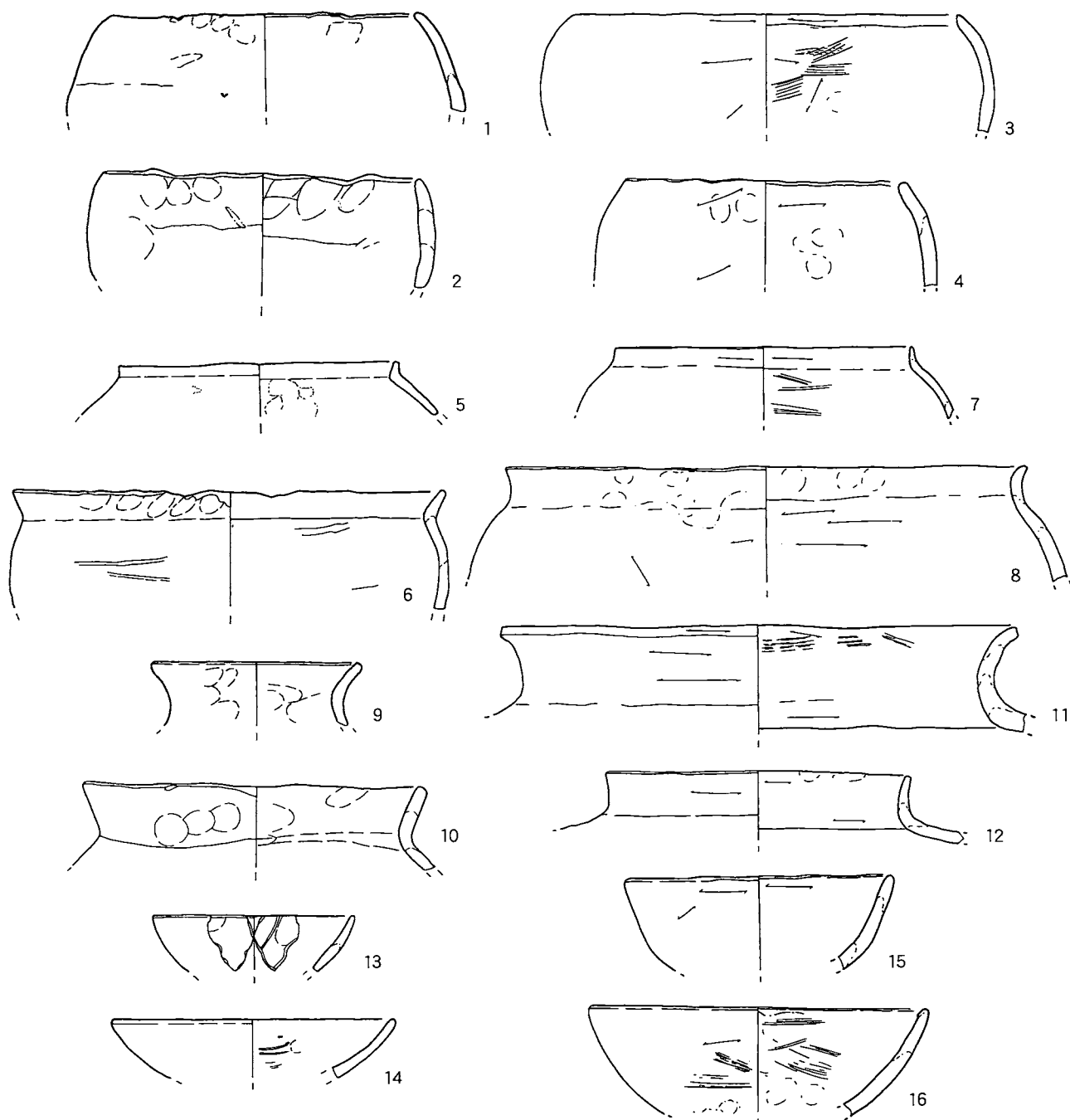
【参考文献】

金武正紀・ほか 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集
今帰仁村教育委員会

具志堅亮 2006「今帰仁城跡、シイナグスク出土土器の検討」『廣友会誌』第2号 廣友会

宮城弘樹・ほか 2004『シイナグスク』今帰仁村文化財調査報告書第17集 今帰仁村教育
委員会

宮城弘樹・具志堅亮 2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』
第3号 廣友会



第8図 シイナグスク(左列)及び今帰仁城跡出土土器(右列)
1～4(鍋)、5～8(甕)、9～12(壺)、13～16(碗)

第2節 中国産陶磁器

1. はじめに

シイナグスク出土の中国陶磁器は年代幅が短く、コンパクトな出土状況である。器種は青磁の碗・皿と白磁の碗・皿である。

2. 青磁

青磁の劃花文碗（第9図1）は口唇部に刻みを入れる輪花碗である。内体面には口唇部刻みの下に片切彫りによるS字形の線を入れて内体面全体を6つに区画し、その区画の中に如意形雲文が片切彫りで描かれる碗の口縁部破片である。この種の碗は12世紀後半～13世紀の龍泉窯系である。第9図2～8の青磁碗は鎬蓮弁文碗で、7点出土している。この碗に類似する碗が中国の古墓（1275年）で出土していることから13世紀後半と考えられる。第9図9は小破片ではあるが龍泉窯系の砧青磁無文碗で、13世紀と考えられる。第9図10・11は同安窯系の珠光青磁皿の口縁部小破片である。これも13世紀に納まる青磁である。

3. 白磁

白磁では第9図12～16の口禿碗皿類が多い。口禿碗皿類は沖縄では13世紀後半から14世紀初頃に出土することから、シイナグスクでは13世紀後半と考えられる。白磁でもう一つ重要なのが第9図17の碗である。この碗は今帰仁タイプ白磁碗である。口唇部を斜め状に平坦に仕上げ、内面下部と外面下部を露胎にする今帰仁タイプⅡである。この碗は今帰仁城跡主郭第Ⅸ層で初めて登場する13世紀後半から14世紀初頃の白磁碗である。

4. おわりに

以上の中国陶磁器をみると年代が重なり合うのが13世紀後半という短時間である。これらの陶磁器は今帰仁城跡主郭第Ⅸ層や今帰仁城跡周辺遺跡の最古陶磁器と同じである。このことはシイナグスクと今帰仁城跡の陶磁器組成が強い関連性を示していると言える。

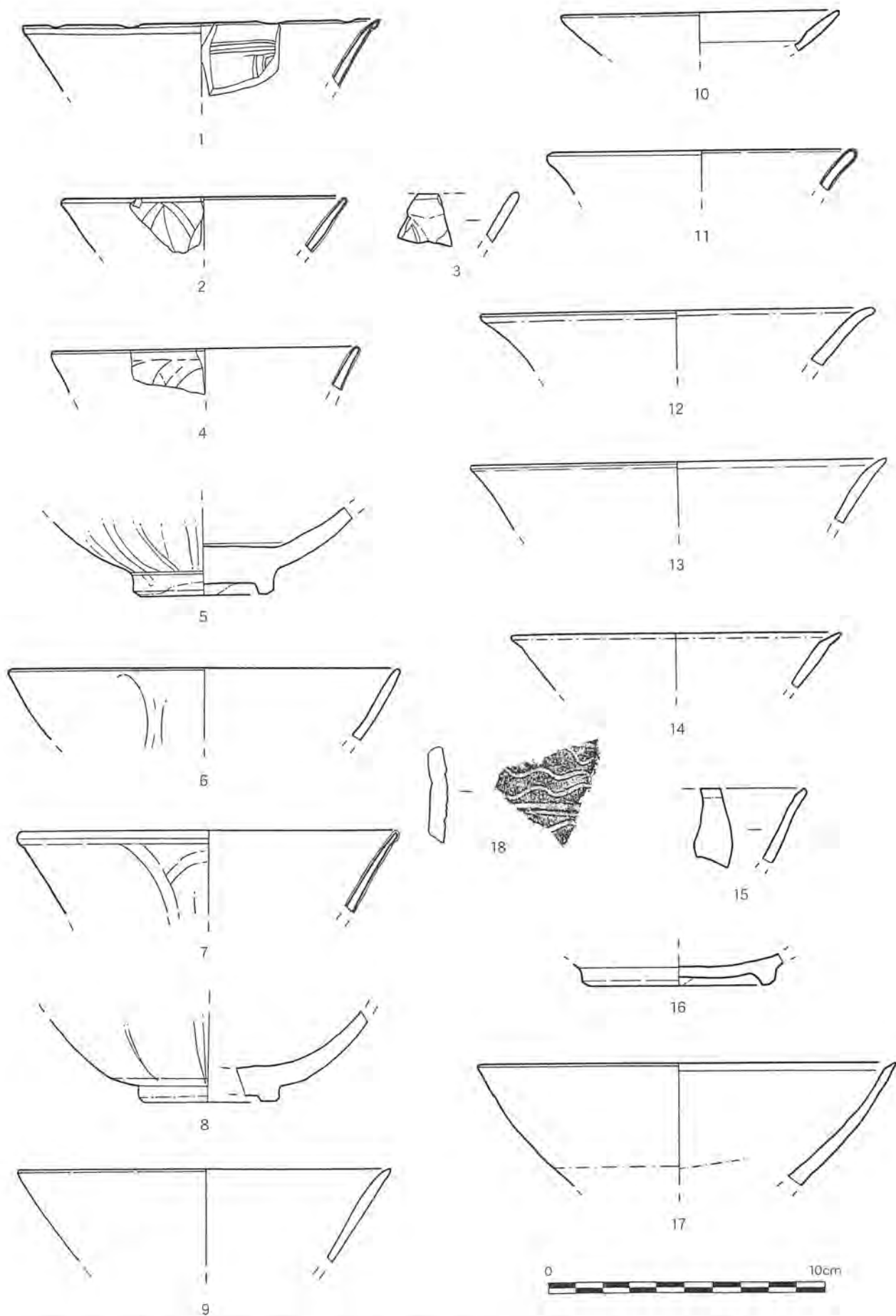
さらに第1表においてシイナグスクと今帰仁城跡の出土破片数の比較を試みた。今帰仁城跡においては城柵を廻らせ、砦を構築し始めるのは第Ⅶ層である。その第Ⅶ層で白磁ビロースクタイプ（14世紀前半頃）の出土が確認されているが、第Ⅸ層やシイナグスクでの出土がみられない。さらにシイナグスクの調査面積が約40m²と狭いにもかかわらず多くの土器が多く出土していることを考慮すると、シイナグスクの活況さを窺うことが出来る。

なお、カムイヤキ須恵器の小破片が35点検出されている。その中の1点は肩部に波状文が廻る壺の破片である（第9図18）。波状文の壺はカムイヤキ須恵器でも古手に分類されている。

	調査面積	土器	カムイヤキ	青磁碗			青磁皿		白磁				合計
		皿様式		劃花文	鎬蓮弁文	砧系	龍泉窯	同安窯	口禿	今帰仁タイプ	ビロースクタイプ	外反	
シイナグスク	40m ²	2,487	35	3	32	4	0	4	11	4	0	0	2,580
今帰仁城跡(Ⅸ層)	約800m ²	619	23	1	8	2	0	3	8	4	0	1	669
今帰仁城跡(Ⅶ層)	約800m ²	1,377	84	1	9	6	3	6	35	30	17	5	1,573

第1表 シイナグスク・今帰仁城跡出土遺物比較

※破片数



第9図 シイナグスク出土陶磁器(1～11:青磁、12～17:白磁、18:カムイヤキ須恵器)

第4章 シイナグスクを巡る伝承及び史料

1. シイナグスクの築城に関する伝承

シイナグスクには、次のような伝承がある。

北山王が居城を造るとき、初め呉我山のシイナ城の場所は、裏側の岩間から湧水量の多い泉があったので、そこに城を築こうと人夫を集めて石を積み始めると、6ヶ月雨が続き、6ヶ月日照りが続いた。そのとき湧き水が涸れたので、「早魃になると水が涸れるからここでは駄目だ。」と言って、今の北山城の場所に城を造ったという（遠藤2001）。

遠藤庄治が今帰仁で民話の収集を行ったのは平成に入ってからであるが、それ以前にもシイナグスクについては同種の説話が記録されている。戦後ではあるが『今帰仁村史』（1975）や『沖縄の城』（1982）にも同種の説話が著されている。大正生まれの方から、戦中避難した際にこのシイナグスクの伝承を記憶していたことを勘案すると、少なくとも戦前よりこれらの説話が語られていたことは間違いない。

また、現在の周辺の住民には、シイナグスクは今帰仁城跡築城以前の城であること、水の便から城造りが断念されたことが語り継がれている。今回の調査においても、所在地の呉我山に隣接する天底集落のご年配の方や、呉我山の区長さんが同様の趣旨の伝承を記憶されていた。

2. シイナグスクを巡る史料の由来

文献では先の史料が最古となるが、さらに遡ることも考えられる。

このことを考える上で示唆的な史料として、北山王統初期の有力者として「湧川王子」あるいは「湧川按司」と呼称される按司が記載もしくは口伝されたものとして、『三山由来記』や『北山由来記』あるいは『長浜系図』といった、いわゆる野史として分類される民間における記録類に記載されている。この「湧川」という地名は、シイナグスクが位置する呉我山（大正9年以前は天底）の隣接する集落であり、後述するが何らかの関連を考えたい史料である。

さて、これらの野史の成立時期であるが『通俗琉球北山由来記』が昭和10年（1935）の刊行で、明治44年に著者東江が北部の旧家で史料を集めまとめたものである。中でも『長浜系図』は、現在のところ確認されていないが、これを写したとされる記録は明治から大正にかけて複数あり、先の『通俗琉球北山由来記』もその一つである。『長浜系図』そのものは士族社会のものであった系図が近世期を通して士族以外の領域へと拡散していく中で、近世末から明治初期にかけて新たな祖先由来記の受容とともに形成されたものとされる（安達2001）。

ただ、この系図自体は、17世紀後半に琉球王府が身分制度の制度物として企図した「家譜・系図」に由来するものであるので、この「湧川按司」に関する記述もこの時期まで遡る可能性も十分あろう。

3. 琉球史における文献記録と伝承と考古資料

上記のような成立年不詳の記録や伝承について、沖縄においては近年の発掘調査の進展により、全くの物語ではなく、一定の事実が内包されているものと考えられるようになっている。

近年、中山王統における浦添城跡や浦添ようどれの調査により、初期中山王権の存在が示されている。浦添城跡は、察度以前の中山王である英祖王の居城として、数多くの伝説や伝承があったが、通説ではその実在が疑問視されてきた。しかし、安里進は、浦添ようどれの発掘成果を

踏まえて、英祖王権が実在するということの根拠として以下の2点を挙げている。①浦添ようどれの発掘成果から得られた造営年代が『琉球国由来記』の記述と同様であること。②初期浦添ようどれの造営にかかった労働力等に多種大量の人員が動員されていること。加えて、沖縄島で発掘された基壇で、13～14世紀の南向き基壇の分布域を英祖王権との関連性で立論している(安里2006)。

安里進が展開する浦添(支配)-今帰仁(被支配)の関係の形成には、多少の疑問を感じるものの各地に展開した按司と伝説上の按司と捉えられてきた、あるいは伝説として歴史学的な評価の定まらなかった按司の存在が、発掘によってある程度の整合性をもって捉えられている点は注目に値する。

この浦添城跡以外にも次のような伝承と発掘調査の関係が指摘できる。

例えば「護佐丸」の築城として指摘される「山田城→座喜味城→中城城」についても文献史的には『毛氏』家譜の「父は山田按司」に依拠しており、明確に山田城主とはされていない。しかしながら、中城城跡が最も新しく築城されたという事実は、発掘調査で出土した陶磁器等により、概ね裏付けるものと言える。ただ、山田城跡と座喜味城跡については、発掘調査では前者が15世紀代に廃絶しており、後者はそれ以降も継続していたことは判明しているが、築城年代については今のところ甲乙つけがたい。これについては、山田城跡において、史跡整備に伴う発掘調査が進展していく予定であるので、今後に期したい。

また、中山王権の移動についても「浦添城→首里城」については、各種施設配置に類似点が指摘されるが、当初より首里城が中山王城であったとする異説もある。しかしこれらの変遷の指摘も、築城時期については、浦添城跡が先行するのは発掘調査により明らかにされており、さらに石積み構築技術の連続性や周辺地名の類似によって補完されることによって、一定の歴史的位置付けが証明されてきている(安里2006)。

4. 「湧川按司」とシイナグスク

それでは、前述した近年のグスクにおける伝承と発掘調査の検証研究を参考にすると、シイナグスクの伝承については、どのように理解を深めることができようか。ここでは、伝承の中で登場する北山王統の初期の按司とされる「湧川按司」という人物とシイナグスクについて、なんらかの関連性がないかについて検討してみたい。

このシイナグスクの伝承以外にも、今帰仁城跡以前の城として伝承される場所はシイナグスク以外に2地点存在する。もう一つは本部町古島(昭和26年以前は謝花)のウフグシクムイ、そして古宇利島の古宇利グスクである。いずれの行政区とも今帰仁・本部に立地することから、今帰仁城の機能していた1665年以前は今帰仁間切の地域内に所在している事が分かる。しかし、これらの遺跡の中でグスク時代の遺跡として遺物の採集等が認められ、なおかつ城跡として明確に位置付けられるものはシイナグスクのみであり、古宇利グスクやウフグシクムイについては遺構等は不明確である。

そこで、「湧川按司」の「湧川」を地名と考えると、他の2グスクは場所が全く違っており、隣接する呉我山に位置するシイナグスクが、この人物に最も関連性が強いものと思われる。既に、新城徳祐は口承された伝承に依拠して、シイナグスクを築いた人物は、だからこそ湧川王子(按司)を名乗ったのではないだろうかとしている(新城1975)。

実際に、湧川にはグスクや同時期の遺跡はなく、シイナグスクにアクセスするための登城道は一般的に湧川からアクセスされることから、この地域が過去に湧川に属していた可能性も考えら

れてくる。

これらから、先に紹介した近世期に成立した野史編纂時において既に伝承として湧川の近傍にあったシイナグスクが、今帰仁城築城前の城として広く認識されていたことを示唆するものではないかと考えられる。

5. まとめ

これまで、琉球史における伝承の史料としての位置づけ、シイナグスクの伝承と野史に記される「湧川按司」が何らかの関連性をもつのではないかということを見てきた。これらのまとめとして、シイナグスクの伝承を再度、発掘調査の成果と照らし合わせてまとめたい。

シイナグスクは発掘調査により、13世紀後半の陶磁器・土器のみで、その後の遺物はなく、概ね14世紀代には廃絶した、非常に短期間のグスクであることが分かっている。このことは、まさに、水の便で途中で築城をやめたという伝承を彷彿させるような事実と言える。

一方、今帰仁城跡はシイナグスクと同時期に築城されたがその主体が14世紀代以降であることが発掘調査で明らかになっている。このことは、シイナグスクから今帰仁城跡に移ったという伝承とは、遺跡の主体時期から見ると、矛盾はないと考えられる。

【参考文献】

- 安里 進 2008『琉球王権とグスク』日本史リブレット42 山川出版社
- 遠藤庄治 2001「今帰仁の伝説にみる北山-北山城と関連人物伝-」『シンポジウム今帰仁の伝説・史話に見る人と歴史と文化 資料集』今帰仁村教育委員会
- 安達善弘 2001『沖縄の祖先崇拜と自己アイデンティティ』九州大学出版会
- 宮城弘樹・ほか 2004『シイナグスク-範囲確認調査報告-』今帰仁村文化財調査報告書 第17集 今帰仁村教育委員会
- 島袋源一郎 1919『沖縄県国頭郡志』沖縄出版会
- 伊波普猷 1905「阿麻和利考」（「阿麻和利考」『伊波普猷全集』第1巻平凡社1974再録）
- 和田久徳 1975「琉球王国の三山統一についての考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第28巻（『琉球王国の形成-三山統一とその前後-』琉球弧叢書⑩ 榕樹書林2006再録）
- 新城徳祐 1975「シイナ城跡」『今帰仁村史』今帰仁村役場

第5章 総括

第1節 今帰仁城跡との比較

シイナグスクと今帰仁城跡は直線距離にして約6 km離れたグスクである。今帰仁城跡は中生代三畳紀に堆積したと考えられる石灰岩の基盤岩に構築されており、シイナグスクも同種の古期石灰岩の露頭地に選地している。また標高が100m前後で河川沿いの谷筋を意識した立地が共通している。

シイナグスクの主郭部と考えられる山頂部の平坦地面積は狭小である、後年整備拡張された今帰仁城との直接的な比較を行うことはできない。そこで、今帰仁城跡VII層の築城初期の今帰仁城とシイナグスクの郭の規模について第2表に示し比較した。ここでは城郭空間の規模、立地の選択性に一定の共通点、及び相違点を指摘することができる。

まず第1に遺構から見ると、シイナグスクではすでに炉跡や柱穴が一の郭・二の郭で見られることに対して、今帰仁城跡主郭では明確な遺構を構築する段階は、シイナグスクと同時期のIX層よりもその上層のVII層以降であることから、シイナグスクの方が隆盛期を迎えたと考えられる。

第2に遺物から見ると、シイナグスクと今帰仁跡IX層ではグスク土器第3様式、カムイヤキ須恵器B群、龍泉窯系青磁Ⅱ類、白磁今帰仁タイプ（F群）が主体となり、同時期の遺跡として形成されていたと考えられる。一方で今帰仁城跡築城期の第VII層で出土しているビロースクタイプ、外反碗が出土し、これらの陶磁器がシイナグスクでは出土していないことから、今帰仁城跡が第VII層の時期においてはシイナグスクの廃絶が指摘できる。

第2節 シイナグスクの琉球史及びグスク研究における位置づけ

これらの事実は、これまで行われた沖縄県内におけるグスクの発掘調査との比較検討により、更に興味深い所見を見出すことができる。県内における発掘調査では主に13世紀後半に丘陵上等の防御性が認められる場所に立地し、石積等の明確な防御施設は14世紀前半に作られるとされている（上原2003）。14世紀に築城をはじめる各地のグスクはその存続時期に長短あるものの、通例は15世紀まで存続し、特に拠点となる今帰仁城跡や首里城跡のようなグスクは16世紀まで継続して利用されていることが多い。このような長期継続するグスクが多く認められる中でも、今帰仁城跡は発掘調査により時期を経るごとにその規模の拡大が層位的に明らかになっている。これらの成果によれば、初期は防御的・生活的空間だけであったのが、例えば御庭と見られる広場的な空間等の再配置などによって機能の配置転換に伴い多くのグスクは築城

第2表 築城期の今帰仁城跡とシイナグスクの遺構比較表

		今帰仁城跡（Ⅶ層）		シイナグスク	
標 高		105m		93m	
城郭空間		主郭	35m×20m	1の郭	35m×30m
		主要三郭	約4,500㎡	1～3の郭	約6,000㎡
			略三角形		略三角形
遺 構		柵列、土留め石積み、 大型掘立柱建物、石畳道		石積み、炉跡、柱穴	
遺物	土器占有率	87.5%		96.4%	
	カムイヤキ	B群を主体とする		B群を主体とするが、 表探では波状文の小壺 が見られる	
	白 磁	今帰仁タイプ・口禿・ ヒロースクタイプ・外反		今帰仁タイプ・口禿	
	青 磁	龍泉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類碗、同安皿		龍泉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類碗、同安皿	
	そ の 他	瓦質土器			

初期の姿を留めなくなってしまうのである。

すなわち、沖縄における一般的な城郭利用の変遷において、出土遺物から沖縄におけるグスクの初期段階のみの非常に短期間の利用に限られるシイナグスクは特異であり、言い換えればグスクの原初的な姿を現在に残している点で今帰仁城跡との関係に限らず、琉球史においても非常に重要な遺跡として位置付けられる。

また、出土陶磁器・土器においては第3章でも述べてきたように限定された組成を示す点において、沖縄における編年研究において重要である。つまり、長期間継続することが多いグスクの発掘調査においては、文献から廃城年代が明らかで井戸等の一括遺物も得られている日本本州の戦国期の城郭と異なり、記年銘の資料がほとんどなく包含層から新旧の遺物が混在して出土することが大半であるため、明確な年代を示すことができる良好な一括資料が少ない状況が続いている（瀬戸ほか2007）。このような中であって、シイナグスク出土陶磁器の組成は13世紀後半～14世紀前半と考えられる大宰府E・F期に限定でき、沖縄における良好な標識資料である。これらと陶磁器と共伴する土器は、グスク土器第3様式に限定できるものであるが、その年代観を示す根拠資料として土器編年研究の一指標とすることができる（宮城・具志堅2006）。

第3節 まとめ

本章では、シイナグスクを今帰仁城跡との比較、さらにグスク研究等に寄与する成果とその位置づけについて考察してきたが、その重要性について再度まとめると、以下の3つの点で重要である。

第1に、シイナグスクはその後山北（北山）の拠点となる今帰仁城跡と同様に、山北の中心地域にある本部半島において最古（13世紀後半）のグスクはこの2つのみであり、沖縄全体で見てもその段階では隆盛期を迎えていた数少ないグスクとして評価することができる。

第2に、シイナグスクの存続期間は極めて短く14世紀前半では廃絶してしまった。これは、逆を言えば今帰仁城跡に見られるように、その後の継続的な城地の整備によって失われたグスクの原初的な姿を残す希少な事例がシイナグスクであると言える。この点で琉球史、グスク研究を紐解く上で極めて重要な遺跡景観を今に伝えている。

第3に、この成果は後述する水の便が悪いためシイナグスクを放棄し今帰仁城跡に移ったとされる伝承とあわせ、今帰仁村内に残る百按司墓や大北墓等の北山に由来、関係する人々が葬られたとされる墓跡等とともに、今帰仁城跡と高い関連性を示す遺跡とともに重要な遺跡であるといえる。

上原 静 2003「グスク時代」『沖縄県史各論編第2巻 考古』沖縄県教育委員会

新城徳祐 1975「シイナ城跡」『今帰仁村史』今帰仁村役場

島袋源一郎 1919『沖縄県国頭郡志』沖縄出版会

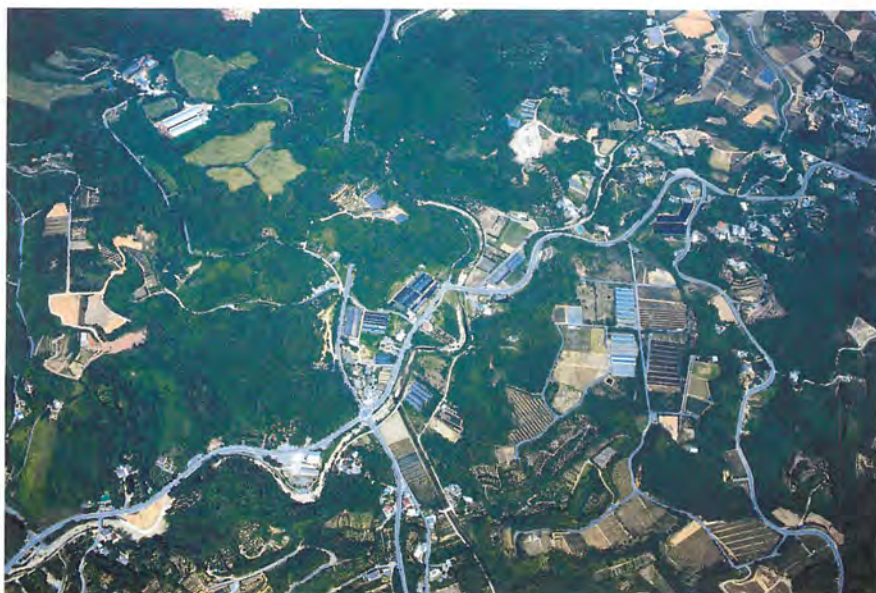
瀬戸哲也・ほか2007「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編

宮城弘樹・ほか 2004『シイナグスクー範囲確認調査報告ー』今帰仁村文化財調査報告書第17集
今帰仁村教育委員会

宮城弘樹・具志堅亮 2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第3号
廣友会

シイナグスク空中写真





1. シイナグスク空撮



2. 一の郭城壁



3. T.P.10 炉跡完掘状況



4. T.P.7遺構完掘状況



5. 潤れ井戸



6. 一の郭平場代採作業

報 告 書 抄 録

ふ り が な		しいなぐすく 2						
書 名		シイナグスク 2						
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名		今帰仁村文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第27集						
編 著 者 名		宮城弘樹・玉城靖・具志堅亮・金武正紀・瀬戸哲也・當眞嗣一						
発 行 機 関		今帰仁村教育委員会						
所 在 地		〒905-0592 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL0980-56-3201						
発 行 年 日		西暦2009年7月31日（平成21年）						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
シイナグスク	な き じん 今帰仁村 こ が や ま 字呉我山	473065		26°39'23"	127°58'33"	平成21年度 2009.7.1 ～ 2009.7.17	約800m ²	今帰仁村内遺跡 発掘調査事業に 係る範囲確認調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
シイナグスク	城跡	グスク時代 (13世紀後半)	城壁 柱穴 炉跡		グスク土器 カムイヤキ 中国陶磁器 青磁 白磁 石器		今 帰 仁 城 跡 の 築城前のグスク であることが 考古学的に確認 された。	

今帰仁村文化財調査報告書 第27集
シイナグスク 2

印 刷 2009年7月31日
発 行 2009年7月31日

編 集 今帰仁村教育委員会
総合教育課文化財係
TEL (0980) 56-3201

発 行 今帰仁教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232番地

印 刷 沖縄高速印刷株式会社
TEL (098) 889-5513
